

梅が咲き始めました。近所を散歩すると、これまで気づかなかったところに梅の木があっていい香りを漂わせています。

現在会員登録数 3,667 人さま。次号は 3 月 23 日発行の予定です／

+-+-----+ ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----+ +

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

+-+-----+ +

■ ----- ■
【1】お知らせ

● IICLO オンライン講座 I 「授業に役立つ！子どもの文学5つのレッスン」
第1回「宮沢賢治を読み直す①「注文の多い料理店」」 ※申し込み受付中！

講師：宮川健郎（当財団理事長）

発展読書案内：土居安子（当財団理事・総括専門員）

視聴料：1300 円 対象：子どもの本に関心のある方ならどなたでも

◇第2回以降は随時配信します。全5回の内容、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#iicloonline1

◇お申し込みは「Peatix」から↓↓

<https://iicloonline1-1.peatix.com>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

*年間1万円以上ご寄付いただいた方には、イイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

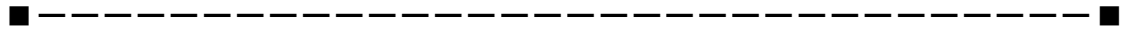
● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム



《 1 》 この本読んだ？ Yasuko's & Yuri's Talk

『総特集 水野英子 自作を語る』水野英子/著 図書の家（小西優里・岸田志野・卯月もよ）/編 河出書房新社 2022年1月 対象年齢：大人

* 今回のゲストは『総特集 水野英子』の編者の一人で、デザイン、制作を担当された小西優里（Yuri）さんです。

概要：手塚治虫や赤塚不二夫、石ノ森章太郎などのマンガ家が住んでいた「トキワ荘」に女性でただ一人住み、少女マンガの歴史を作ってきた水野英子（1939年～）に徹底的にインタビューして彼女のマンガ観を掘り下げた本。500点以上のカラーイラストが入っており、一条ゆかり、山岸涼子、わたなべまさこ、北島洋子らが水野や彼女の作品に対する思いを語っている。巻末には年譜、詳細な調査に基づいた作品リストもある。

Yasuko: マンガ家総特集の5冊目になりますね（注：三原順、坂田靖子、木原敏江、わたなべまさこ）。

Yuri: 出版社からの要望もあり、記念すべき5巻目は、少女マンガの祖ともいえる水野先生をとりあげることになりました。

Yasuko: 水野先生へのインタビューが中心で、とても興味深くて一気に読みしてしまいました。

Yuri: そうおっしゃっていただけるとうれしいです。今回は、先生のプライベートな話というより、『白いトロイカ』や『ファイヤー！』などの代表作はもちろんのこと、短編や絵物語など先生のお仕事を俯瞰できるようにほぼすべての作品についてうかがうように心がけました。

Yasuko: 時系列に作品が紹介されながら、それについて聞き手で「図書の家」の岸田さんの質問に水野先生が答えるという構成で、取り上げられた作品をすべて読みたくなりました。そして、先生が、伏線たっぷりの物語も、コマ割りも、登場人物像（キャラクター）も、少女のドレスや髪型などの描写も、その時代その時代を切り拓いてこられた方だということがわかりました。終章にマンガ研究者のヤマダトモコさんが「水野英子—少女マンガの歴史をとりもどすための鍵」の中で、「ミーム（文化的遺伝子）の継承」(P.188)という言葉が使われていますが、私が読んで親しんで来た1970年以降のマンガに水野先生のミームがいっぱい継承されていることに気づきました。

Yuri: そうなんです。水野先生といえば、トキワ荘の紅一点の住人ということがよく紹介されるのですが、先生のすばらしさは、少女マンガへの貢献にあると思います。それは、水野先生が子どもの頃から映画や文学に多くふれると同時に、手塚治虫先生の作品を理解し、それらをご自分の中で咀嚼して、独自の物語、キャラクター、少女マンガの技法を生み出していったということだと思います。

Yasuko: 岸田さんが、水野先生の帆船の後ろ姿の絵の正確さを指摘すると、水野先生が映画を見ていたせいだとおっしゃり、「1回見たら忘れませんから。」と発言されています。天才だなと思いました。

Yuri: 手塚先生をはじめとして、すばらしい多くのマンガ家は「目カメラ」を持っていらっやいます。

Yasuko: この本の魅力のひとつは、このように、編者の「図書の家」が少女マンガ史を見渡す視点を持って水野先生にインタビューをし、先生の作品を

歴史の中に位置づけている点だと思いました。もう一つは、ビジュアル面。カラーページはふんだんにあるし、連載された作品の雑誌の扉絵が見開きにならずに一つと並べられていて圧巻です。

Yuri: 水野先生はマンガ家なので、絵を見せたい。それも、初出の雑誌の絵を見てもらいたい。これは、「図書の家」が総特集を作ることで、アーカイブとして後世に残せたらという願いを持っているからです。ですので、作品リスト、年譜もできるだけ丁寧に作っています。万博公園にあった旧国際児童文学館でも現国際児童文学館でもたくさん調査をしました。

ところで、ビジュアル面は私の担当で、たいへんでしたが、先生の絵はどれもすばらしいので作業をしていてとても楽しかったです。といってもあまりに入りたい絵がありすぎて「ページに入り切らない！」と叫んでいました（笑）。

Yasuko: 表紙の絵も美しいです。マンガ史を知る上でも少女マンガ論を考える上でも、児童文化史を知る上でもぜひ多くの人に読んで欲しい本だと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第78回「おきなぐさ」

命のゆくえ

前回(当メルマガ NO.137)の「耕耘部の時計」は、ことわってはいませんが、小岩井農場が舞台でしょう。「おきなぐさ」は、その小岩井農場の南の丘の物語です。風のすきとおった、ある日の昼間、丘のかれ草のなかの2本のおきなぐさが静かに話します。

——「ねえ、雲が又お日さんにかかるよ。そら向うの畑がもう陰になった。」
「走って来る、早いねえ、もうから松も暗くなった。もう越えた。」

この童話は、「うずのしゅげを知っていますか。」という問いかけではじまります。語り手は、うずのしゅげは植物学ではおきなぐさ(翁草)と呼ばれるけれど、その名前とはちがって、やさしい若い花だともいいます。そして、「うずのしゅげというときはあの毛茛科(きんぼうげか)のおきなぐさの黒繻子の花びら、青じろいやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみなはっきりと眼にうかびます。」と、その語感を味わいます。

丘のうずのしゅげのそばへ、ひばりが降りてきて、「今日は、風があっけいけませんね。」と声をかけます。うずのしゅげが「僕たちも一ぺん飛んで見たいなあ。」というと、ひばりは、「飛べるとこじゃない。もう二ヶ月お待ちなさい。いやでも飛ばなくちゃなりません。」というのです。

それから二ヶ月め、うずのしゅげの花は、すっかりふさふさした銀毛の房にかかります。また、ひばりがやってきます。——「今日は、いいお天気です。どうです。もう飛ぶばかりでしょう。」「ええ、もう僕たち遠いところへ行きますよ。どの風が僕たちを連れて行くかさつきから見ているんです。」きれいな、すきとおった風が来ます。

く丁度星が砕けて散るときのようにからだをばらばらになって一本ずつの銀毛はまっしろに光り、羽虫のように北の方へ飛んで行きました。そして

ひばりは鉄砲玉のように空へとびあがって鋭いみじかい歌をほんの一寸歌ったのでした。)

うずのしゅげが雲を見上げていた丘から、一気に世界が広がります。おしまいに、語り手は、「天上へ行った二つの小さなたましいはどうなったか、私はそれは小さな変光星になったと思います。」と述べます。「賢治童話において世界がどのように見えているか、その秘密を深々と暗示する作品」としたのは天沢退二郎ですが(新潮文庫版『注文の多い料理店』「収録作品について」、ひばりに「僕たちの仕事はもう済んだんです。」と書いて飛び立った(種子の散乱です)うずのしゅげの命のゆくえを描いた一幅の絵のような童話です。(馬車別当)

(本文の引用は、新潮文庫版『注文の多い料理店』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 32

地理的な国境や言語的な国境にこだわらない作家だけが、普遍的な作品を書くことができる。

(「文化を売り買いするのか、それとも文化を生み出すのか」『ぼくはただ、物語を書きたかった。』ラフィク・シャミ/著 松永美穂/訳 西村書店 2022年2月 p.54)

これは、「1946年にシリアのダマスカスで生まれ、現在はドイツ在住でドイツ語で作品を発表し続けている作家ラフィク・シャミの、自伝的エッセイ集」(「訳者あとがき」P.225)の一節です。シャミは、大人向けの小説やエッセイも出版していますが、『人形つかいマリオのお話』(松永美穂/訳 徳間書店2020年11月)や絵本『こわい、こわい、こわい? しりたがりやのネズミのおはなし』(カトリーン・シェーラー/絵 那須田淳/訳 西村書店 2016年11月)や『片手いっぱい星』(若林ひとみ/訳 岩波書店 1988年7月)などの児童書もあり、その豊かで奥深くユーモラスかつどこか悲しい物語は心に残ります。

このエッセイ集は、「亡命」「故郷」「少数派」「民族」「文学」「批評」「語り」「物語」などがキーワードになっており、シャミの深い思索に刺激されながら、一方で、まるでシャミが書いている場所に一緒にいるように錯覚するような臨場感があります。それはたとえば、「悲しみというのは一匹の忠実な犬だ」(p.88)から始まる「忠実な犬」というエッセイで、「故郷への憧れや、それを失った悲しみは、」「友人を思い出させる一つの顔。あるいは何かの匂い」などによって「浮かび上がってくる」と描写されている部分です。

そして、自分に厳しいところや、批評家や他の作家やアラブの独裁国家に迎合する人たちへの痛烈な批判は「ドイツの読者」(「訳者あとがき」p.225)だけでなく、私自身も襟を正される気持ちになりました。同時に、「ぼくの視点から」で、著者が若い人たちへの成功の秘訣として、25のポイントを挙げ、その中に「あるテーマについて何の意見も述べられないくせに、曖昧な言葉や本の分厚さによってそれをごまかせると考えるのは、愚かな人間だけだ」

(p.138)などの指摘がある点など、ユーモラスな部分もたっぷりあります。また、自分の作品の朗読会を常に行っているということも書かれており、「千夜一夜物語」の伝統を大切にしている作家の思いが伝わって、ドイツ語がわからなくても聞いてみたくなりました。

引用の部分は、「自由に暮らしているシリア人として」いかなる文学を書くべきなのかについて考えているエッセイで、啓蒙もアラブの独裁者への迎合もあり得ないと書いた後に引用の一文があることで説得力があります。手元に置いて何度も読み返し、また、彼の作品も読みなおしたいと思いました。(Y)

《4》 行って来ました！

姫路文学館で3月21日まで開催されている「絵本作家 長谷川集平の仕事展 絵本デビュー46年のキープ・オン・ロックン！」に行ってきました。原画、創作のための自筆資料、道具、写真など約230点が展示されています。

展示は大きく2章に分けられ、第1章「どこまでもつづく道」では、長谷川集平さんの生い立ちや、現在までの作品や活動が、絵本の原画や資料、写真などで紹介されています。出身地である姫路での誕生から名古屋での浪人時代、東京での絵本作家としてのデビュー、長崎への移住から現在までがわかりやすく展示されていました。第2章「表現の総合格闘技」では、小説、評論、挿絵、音楽など、絵本以外のさまざまな仕事がジャンルごとに見られるようになっていました。すべての展示から、長谷川さんが絵本というメディアを深く探究し、さまざまな可能性を模索されている様子が伝わってきました。

特に私が興味深いと思ったひとつは、「モノクロ：ぼくのおじさん 行く手を照らした大人たち」という、長谷川さんが影響を受けた「おじさん」が紹介されているコーナーでした。ここには、長谷川さんの叔父さんで映画監督の浦山桐郎さんとの関係や、フォークシンガーの高田渡さん、イラストレーターの岩田健三郎さん、人形作家の川本喜八郎さんが写真や雑誌記事などとともに紹介されていました。

また、谷内こうた『のらいぬ』（至光社 1973年）、田島征三『しばてん』（偕成社 1971年）をみて絵本を創ろうと思ったこと、長新太さんを訪ねたときの葉書やそのことを書いた日記なども興味深かったです。

2つめの展示場の入口には、未刊行の絵本『にんげんがいじわるやからや』を長谷川さん自らが朗読されている動画がありました。いつか本の形で読んでみたいなあと思いました。(K)

姫路文学館 <http://www.himejibungakukan.jp/>

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介

- JBBY子どもの本の日フェスティバル
「パッとひらめき、サッとえがく『アート大喜利』」
個性豊かな絵本作家たちが、もらったお題に即興で絵を描きます。

日時：3月13日（日）15：00～17：00
場所：オンライン（Zoom） 参加費：有料 <https://jbby.peatix.com/>
講師：きのとりこ、館野鴻、田中清代、垂石眞子、とよたかずひこ、
はたこうしろう、降矢なな、堀川理万子
進行：広松由希子、土居安子
主催：（一社）日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■

【4】プレゼント

■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『総特集 水野英子 自作を語る』（1名）、豊島区立トキワ荘マンガミュージアム企画展「鉄腕アトムー国産初の30分テレビアニメシリーズ」招待券（5名）をプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.138 プレゼント希望」とし、(1)希望のプレゼント名 (2)お名前 (3)郵便番号・住所 (4)電話番号 (5)メールアドレス、よろしければ (6)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は3月11日（金）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |
— | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

3回目のワクチン接種が始まっています。「コロナが終わったら」と思っていた気持ちを「コロナといかに付き合っていくか」に切り替えながら、毎日を丁寧に暮らしたいと思えます。（TA）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp